

移住女性と子どもたちに 「ちから」を

カラカサン—移住女性のためのエンパワメントセンター
平成 17 年度子育て支援基金
「地方分」助成団体

DATA

〒212-0057 神奈川県川崎市幸区北加瀬1-34-8 KKFハイム201
TEL : 044-580-4675/FAX : 044-580-4676
<http://www.k5.dion.ne.jp/~kalakasa/>
e-mail : kalakasan@inada-noborito.com

本誌第 40 号 (2007 年冬) の『チャレンジレポート』で取り上げた「カラカサン—移住女性のためのエンパワメントセンター」。第 40 号では、平成 17 年度の助成事業の様子を紹介しました。

その後、どのような取組みをされているのでしょうか。ここでは、その活動の様子を改めてご報告します。お話を伺ったのは、共同代表である山岸素子さんと西本マルドニアさんです。

カラカサン

まず、カラカサンの活動を振り返りましょう。カラカサンの前身は、1992(平成4)年にカトリック横浜教区で組織された「滞日外国人と連帯する会」です。ここでは、日本に滞在する、フィリピン、ラテンアメリカ、韓国人に対する相談活動、自助グループ活動などの支援活動を行ってきましたが、2002(平成14)年3月に解散されることになり、そのなかから、フィリピンからの移住女性への支援に携わっていたメンバーが中心となって、この活動を引き継ぎ、同じ年の12月にカラカサンが生まれました。

国際結婚や就労などによって移住する女性たちは日本社会のなかで、移住者であること、女性であることを理由に、いわれない偏見と差別に苦しめられています。加えて、人身売買や、家庭や職場などでさまざまななかたちの暴力にさらされる場合も少なくありません。カラカサンでは、このような被害を受けた女性に対する相談や、自立に向けた支援などを行ってきました。メンバーには、フィリピンから実際に移住し、当事者だった(DVからのサバイバーである)女性も多くいます。

ちなみに、「カラカサン」とはタガログ

語の「ちから」という意味で、移住女性たちが相互のかかわりあいのなかで、自らの尊厳と「ちから」を回復すること(エンパワメント)が活動の理念となっています。

カラカサンの活動

カラカサンの具体的な活動は次のとおりです。

- ① 相談・カウンセリング
- ② 女性へのフォロアップケア
- ③ アドボカシー・ネットワーキング
- ④ 子どもプログラム

- ・ 文化の教室
- ・ 相互交流化活動
- ・ フリースペース
- ・ 家庭訪問、カウンセリング

フィリピンからの移住女性の場合、日本の男性と結婚をしているケースが多く、設立当初は、家庭内の暴力(DV)やこれを原因とする離婚、在留資格、子どもの認知などをめぐる問題に対する相談などが非常に多かったそうです。

具体的な活動は、役所や弁護士事務所、裁判所などへの同行、通訳、カウンセリング、自助グループ活動、セミナー、ワークショップの企画・主催など実に多彩です。また、支援を必要とする人が法的にも、経済的にも複雑な課題と背景を抱えているこ

とから、その支援は多様で、長期間に及ぶことが特徴です。

平成17年度の助成

平成17年度は独立行政法人福祉医療機構の子育て支援基金の助成を受け、次の事業に取り組みました。

① 家庭支援事業

虐待を経験した、もしくは暴力をみて育った子ども及び夫からの暴力を経験している移住女性の家庭への支援を目的とした家庭訪問や事務所におけるカウンセリング。

② 多文化教育事業



サマーキャンプでフィリピンのダンスを

異なる二つの文化的背景をもつ子どもたち、とりわけ虐待を経験した子どもや暴力をみて育った子どもたちが安心し、自信をもって生きていくことができるように、語学教室、料理教室、音楽教室などを開催し、フィリピンの文化や言葉にふれることによって自己実現の場、子ども同士の支え合いのための居場所をつくる。

③ 相互交流事業

イチゴ狩り、バーベキュー等の野外活動、サマーキャンプ、クリスマスの集い等のイベントにより、子どもたちの出会いのきっかけをつくり、互いがより深く知り合える機会と場所を提供する（本事業をきっかけとして、②の多文化教室事業の居場所づくりにつなげる）。

④ 虐待経験ないし父から母への暴力をみて育った移住女性の子どものケアのあり方を考えるフォーラム開催事業

虐待経験ないし父から母への暴力をみて育った移住女性の子どものケアのあり方について課題を整理し、その結果についてフォーラムを開催して発表する。

助成を受けて

虐待経験もしくはDVが子どもに与える影響についてその重大性は認識していたものの、助成を受けるまでは、母親である移



みかん狩り

住女性へのケアで手一杯でその子どもに対する支援までは十分な取組みができなかったといえます。また、資金的にも余裕のあるものではありませんでした。

これが、助成を受けたことで、子どもへの支援にも取り組めるようになりました。平成17年度の助成を受けたことにより、「子どもプログラム」の基盤をつくることのできたのです。

虐待経験やDVが子どもに与える影響は非常に大きいものです。身体的に傷を被るばかりでなく、心に与えた傷は他者とのコミュニケーションや人間関係を取り結ぶことを難しくさせます。さらに、母親との関



大きなイチゴがとれました



おいしいおもちがつけましたか？

係までも悪化させてしまうのです。移住女性と日本人の夫との間に生まれた子どもが自己のアイデンティティを確立させるのが難しいことは容易に想像できます。果たして自分は日本人なのか、フィリピン人なのか、何者なのか。

加えて、子どもたちは学校や社会のなかでいじめを受けたり、疎外感を覚えたりする場合も多く、自尊心や自己肯定感を育てることができずに苦しんでいます。本来、支えられるべき母親との関係が悪化してしまっているようでは、安息の場であるはずの「家庭」までもが苦しみとなります。

このような状況にある子どもたちにとって、語学教室や料理教室、イチゴ狩り、バーベキューなどの野外活動という、同じような境遇にある子どもとの交流は人間関係を築ききっかけとなり、またフィリピンの文化を学ぶことで自尊心を回復させる最初のステップとなったといえます。

さらに、フォーラムの開催を通じて、学校や母子生活支援施設などから協力の要請を受けるなど、他団体にも波及効果をもたらしました。

一方で、単年度の助成だったため、次年度以降も事業を継続させていくには工夫が必要でした。たとえば、助成年度は無料だったものを参加費をもらったり、ほかの助成

金を活用したり、バザーの開催や教会からの寄付金の利用などの苦勞をされたそうです。

また、これからはカラカサンに訪れた当事者である女性からも支援を受けられるようにしたいといっています。カラカサンのような相談先となる団体を資金的に、もしくは支援する側として実際の活動に参加することでほかに支援を必要とする人を支えることができますし、またその活動への参加そのものが本人の「ちから」にもなるといえます。

助成を受けたその後

カラカサンの支援は子どもたちをも「エンパワメント」しています。子どもたちは、その経験から人前で何かをしたり、自分をアピールしたりということが大変苦手です。それが、カラカサンの活動を通じて、また母親たちへ支援、母親たちの活動を間近にみることで、自分自身を肯定的に捉えられるようになり、子どもたちも「ちから」を得るようになるのです。もちろん、心にダメージを追った子どもたちも「ちから」を得るようになるまでには、長い時間が必要です。しかし、このような子どもたちの変化は、「母親たちにとっても大変な喜びだ」と西本さんは語ってくださいました。



クリスマスの集いでダンスを



サマーキャンプで

これから

カラカサンは、平成20、21年度と継続して、「虐待経験をもつ移住女性の子どもへの支援」として、子育て支援基金の助成を受けています。DVを身近にみてきた、感じてきたという虐待経験をもつ子どもに対しては、その背景をしっかりとふまえた支援が大切です。今後カラカサンでは、このような子どもへのケアにもより力を入れていきたいと思っています。そして、同じような苦しみを抱えている（移住女性の）子どもたちのため、自分たちの実践をより広めていきたいと考えているそうです。

また、同じような課題を抱えている教育関係者や福祉関係者とのネットワークづくりにも取り組んでいきたいといっています。

カラカサンの魅力

カラカサンの活動は、支援を必要とする女性が複雑な事情や背景をもっていることから、非常に多岐に、そして長期間にわたります。活動を続けていくには、多くのパワーを必要とするように思います。このようなパワーがいったいどこから生まれてくるのか、お話を伺いながら不思議に感じていました。このことについて、山岸さんにお話を伺うと、フィリピンの文化の影響が

大きいと仰います。フィリピンの文化には、他者への配慮や助け合いが基盤にあります。それは、自身が大変な状態あっても失われないどころか、むしろもつとも大変な人こそ、それを大切にしようです。日本では家族の面倒をみるといっても、自分の子供か親兄弟までがせいぜいであるのに対して、フィリピンでは、大家族で1人しか働き手がいなくとも、いとこやもつと遠い親戚などが支えあつて生活しているという場合が多くあります。このような、コミュニティでの支えあいこそが日本にも必要ではないかと山岸さんはいいます。これは人間関係の「ちから」です。「経済が疲弊し、人間関係が閉塞して小さくながちな日本の社会にあつて、これがもつともつと広がっていけない」とは山岸さんの言葉です。大変な状況におかれていても、それを言葉にして助けを求めることで、助け合いがつかがっていきます。実際に山岸さんは、二人のお子さんの子育てをカラカサンのメンバーに助けってもらいながら、この活動を続けてきました。「私一人では子育てはできなかつた」といいます。こういった、助け合い、人間関係の「ちから」こそがカラカサンのパワー、そして魅力なのかもしれません。